

REPORT

〈事業紹介〉持続可能な公民館活動のために

「福生市ジュニア社会教育士」の

発案と実践から見えてきたもの

児童・生徒が企画し、大人と共に考えるシンポジウムを通じて

福生市教育長・社会教育士 石田 周

1 公民館が盛んなまち 「ふっさ」

福生と書いてふっさと読む福生市は、令和2年度に市制施行50周年を迎えた。東京都心から西へ約40km、武蔵野台地の西端に位置する人口約5万6千人のまちである。面積は約10km²だが、市の東北部にある米軍横田基地が行政面積の32%を占めている。人口のうち外国人比率は約8%、国籍69か国と国際色が豊かである。市内には江戸時代から続く造り酒屋が玉川上水沿いに2軒あり、東京都西多摩の玄関口として発展してきた歴史をもつ、自然豊かなまちでもある。

そのような福生市の実際の市域は7km²で、全国で3番目に小さい市であるが、公民館が3か所、図書館が4か所、体育館が3か所あり、社会教育・生涯学習が盛んな土地柄である。これは、先人が培った文化の証であるとも言える。加藤育男福生市長は、毎年の市民文化祭はもとより、本館まつり等の催し物があると必ずといってよいほど参観される。私も教育長としてできる限り各公民館を回るようにしている。各サークルでは私の顔も覚えてくださり、例えば文化祭で並ぶ手芸作品や盆栽、切り絵や絵手紙、生け花等について、熱心に解説をしてくださる。その多く

は、70歳代から80歳代。30年以上、福生市の各公民館で教養の向上や生活文化の振興に取り組んで来られた方々ばかりである。

ご説明を拝聴しつつ、私がいつも考えているのは、この先達による公民館活動は、まさに本市の宝であり、次世代に続くものであってほしい、ということである。

しかし、ここ数年、公民館登録サークルは減少しており、令和6年度は、令和2年度に比べて35サークル減の160サークルとなっている。どのサークルも、課題はメンバーの高齢化と後継者育成。若い市民を仲間に入れるこ

とが持続可能な活動の鍵となっていることだ。

このことは本市職員が企画する「公民館主催講座」に参加する市民も同様の状況である。講座の内容にかかわらず、いつもご参加いただける方は高齢化している。保育士が乳幼児を講座中にお預かりする取組にも力を入れているが、若い世代、特に小中学生の姿を見ることはほとんどない。18歳未満の子どもたちも、社会教育の対象者であるが、近年は、その参加を視野に入れた講座を企画してこなかったことも影響している。

2 ジュニア社会教育士の企画

そもそも公民館は、大人だけのものではない。年齢、性別、職業等を問わず、全ての人に開かれた場所として運営されるという大原則がある。

福生市教育委員会は、現在、「こどもまんなか ふっさ」をスローガンに諸施策を実施している。学校教育は子どもが真ん中にあることが当然であるが、社会教育・生涯学習の諸施策において

も、子どもの活躍にスポットを当てることで、本市の社会教育の次世代を担う人材を育成したいと考えた。

そこでその第1弾として、令和6年8月、図書館が企画したジュニア司書養成講座を実施した。市内各小中学校から応募があり、図書館職員が講師となつて講義・演習・実技の講座を実施。24人が「読書リーダー」の認定証を授与された。9月以降、子どもたちは定期的に図書館に集まり、館内展示コーナーの選書や、図書館発行のブックリスト「ふっさつ子」が選んだおすすめの本32冊」のコメント作成のほか、図書館に来館する幼児に対しておはなし会を実施し、好評を博した。

その報告を聞いたとき、私はこれまでお会いしてきた公民館各サークルの先達の言葉を思い浮かべた。

若い人たちにも、公民館にきてほしい。

一朝一夕には難しいが、始めの一步は、福生の子どもたちに、公民館の存在に気付いてもらうことだ。そのためには、ジュニア司書養成講座と同様に、ジュニア社会教育士の育成講座はでき

ないだろうか。

私の思いに呼応して、佐藤克年公民館長が中心となり、秋間千香子係長、小笠原雄二主事による手作りの企画が始まったのは、令和6年12月のことだった。

文部科学省の担当課に問い合わせたところ、社会教育士のロゴマークを元に、「福生市ジュニア社会教育士」の称号を使用してもよいとご快諾をいただいた。これは地区教育委員会内のみならず公民館内でもしか用いない称号だが、子どもたちにとっては活動の出口として動機付けになると考えた。



3 ふっさの「しあさつて」を 考えよう！シンポジウム

(1) 講座の概要

この講座は、児童・生徒を対象とする企画ミーティングを中心とした4回の講座と、一般市民を対象としたシンポジウム1回の計5回、2月から3月の日曜日午前中に開催した。会場は福生市公民館松林分館である。

講座を修了した子どもたちには、「福生市ジュニア社会教育士」の認定証を授与される。

講座のねらいは2点ある。1点は、市内の児童・生徒が学校・学年を越えて地域の仲間として出会い、「福生のしあさつてを考えること」をテーマに、大人向けのシンポジウムを企画・立案すること。自分たちが企画した講座に、地域の大人が参加することで、企画する楽しさやその難しさ、講座をリードする成功体験を味わわせたい。

2点は、大人向けのシンポジウムを通じて、子どもたちが公民館活動に参加する地域の大人と出会い、福生市の公民館活動への興味・関心を高めるこ

と。このことで、地域の一員としての自覚を育みたい。

対象は小学校第5学年児童から中学校第3学年生徒で、市報令和7年1月4日号に募集記事を掲載した。市内校長にも協力を求めた。その結果、小学生13人、中学生5人（都立中高一貫校生徒含む）が応募し参加した。

大人向けシンポジウムについても、参加者を市報で公募した。12人の市民に応募していただいた。福生市公民館松林分館利用者、福生市公民館運営審議会委員、社会教育を専門とする大学教員、民生委員、教育委員、社会教育委員、市議会議員等、いずれも本市の公民館活動に長く取り組んで来られた先達の面々である。

(2) 企画ミーティングの実際

4回の企画ミーティングは、手探りの中で始まったが、回を追うごとに子どもたちは熱心に取り組んだ。これは、担当者として直接子どもたちの前に立った小笠原主事のファシリテートの成果である。また、佐藤館長・秋間係長の支えが功を奏していた。参加した

子どもたちにとって、社会教育士なる存在はもとより公民館自体がファーストコンタクトだったため、丁寧な説明や受容的な対応をとるよう心掛けた。次に簡単に活動内容を紹介しよう。

・2月2日 企画ミーティング 1

- ① 福生市公民館、公民館講座についての説明
- ② 今回の子ども企画講座の趣旨、内容等を知る。
- ③ 「福生のしあさつて」をイメージする。

小学生と中学生が3グループに分かれ、同じテーブルで協議する体験は、日常ではあまりないため、やや緊張していた。

・2月16日 企画ミーティング 2

- ① 各班で、福生のしあさつてを具体化する
- ② シンポジウムで、どのような提案ができるか検討

この日、福生市の知名度や、基地の町であること、造り酒屋が2軒もあること等が話題となった。それを踏まえて、A班は「福生市が誇る文化遺産」、B班は「福生市の人口減に歯止めをかける」、C班は「町が汚ければ好かれないう」等について、自分たちでテーマを決めて熱心に話し合っていた。

・3月2日 企画ミーティング 3

- ① 各班で、「ふっさのしあさつて」に向けた提案事項をまとめ、プレゼンテーションを準備する
- ② シンポジウム当日の役割分担を決定する。司会、提言者、ラウンドテーブルの司会、記録、報告等

福生市の児童・生徒は、国のGIGAスクール構想で、現在、一人1台iPadを貸与されている。いつでも、どこでも使用できるよう、LTEモデルであるため、今回のプレゼンは、自然にiPadを用いたものとなった。

また、3回目の企画ミーティングだったこともあり、仲間意識ができて、会議終了後も自主的に集まって準備する班も現れた。子どもも大人と同様に、楽しければ集い、集えれば楽しく高め合おうとする。社会教育の楽しさを子どもたちの姿から感じることができた。

・3月16日 企画ミーティング 4

- ① シンポジウムのリハーサル
- ② 各班の提言内容、プレゼンテーションの総仕上げ

学校では3学期の終業式が間近な頃だが、子どもたちはシンポジウムに向けて準備に余念がなかった。学校の授業ではないことから、自由度が高く、その分、主体的・自発的な様子が顕著にみられた。一方で、シンポジウムに参加する大人（一般市民）のことを考えて、果たして、自分たちの提案を踏まえて、大人が福生市のしあさつてについて、真剣に考えてくれるのか、ラウンドテーブルをリードできるのか、不安を口にする子どももいた。

(3) 3月30日

シンポジウム当日の様子
当日のプログラムは、次のように進んだ。

1. パネルトーク

みんなで考えた福生の「しあさつて」

A班「福生市から世界遺産を！」

B班「人口増につなげよう、福生の良いところ」

C班「町がきれいになる」「ミの分別」

2. ラウンドテーブル

大人たちが考える、福生の「しあさつて」を交え、子どもたちと語り合う。

参加者のほか、子どもたちの保護者や市議会議員等に参観していただき、総勢50人の会となった。

第1部は、子どもたちは、「提案」という観点から福生市の将来像や、よりよいまちにするための課題と解決策等を、初めて出会った大人たちに堂々と



第1部発表



ラウンドテーブル

発表した。大人たちからは盛大な拍手が送られた。

第2部は、10人の大人の参加者に、ABC3つの班に分かれて座っていただき、子どもたちがファシリテートして、福生のしあさつを考えてもらう内容である。大人たちは先に紹介したとおり、いずれも福生市の社会教育、

公民館活動を先導してきた方々である。温かい視線で子どもたちを包みつつ、中には厳しい指摘をする方もいた。子どもたちは実に真剣な表情で大人たちの話を聞き、じっくりと考えて精一杯、答えていた。

傍から聞いてみると、福生のしあさつを考えるという課題に正対した「本

気」を子どもたちに投げかける場面があつて、萎縮してしまわないか不安になった。B班では、「人口が減ることは本当に悪いことなのか」「町おこしのお祭りは、やればよいだけか」「定量的な観点よりも定性的な観点が必要ではないか」等の問い掛けがあつた。これらの厳しい問いを子どもたちはどのように受け止めたのだろう。B班のラウンドテーブルの記録には次のように書かれていた。

「今いる人々に呼び掛けて、大人と子どもが一緒に参加し、意見を共有できたらよい。そして若い世代の人々に福生のあまり知られていないことを知ってもらい、次の世代につなげていく」

このことは、参加した大人たちにとっても、共感の得られる内容だったのではないだろうか。

4 福生市

ジュニア社会教育士認定証と、今後の展望

第2部終了後、閉会式が行われた。まず、佐藤館長から、講評が行われた。



石田 周
(いしだ まこと)

昭和 39 年生。
玉川大学大学院修士課程修了。文学修士。社会教育士。ボイスカウト立川第 4 団所属。平成元年東京都小学校教諭。
平成 12 年から 21 年間東京都教育委員会、地区教育委員会等で、学校教育の指導事務を担当。東京都教職員研修センター研修部長を最後に東京都退職。
令和 3 年 4 月から現職。放送大学にて社会教育士を取得。

ラウンドテーブルで参加者の意見を引き出そうとする姿勢、相手の意見を肯定的に受け止めようとする姿勢は、生涯学習を支える社会教育士として求められる基本姿勢であること。今回の講座を機会に、公民館にこれからも来てほしいこと、今日のこの経験は、今後の生活に必ず活かせることなど、子どもたちは真剣に佐藤館長の講評を聞いていた。

続いて「福生市公民館ジュニア社会教育士」認定証が子どもたちに授与された。茶話会となったクロージングミーティングでは、来週、4月6日の日曜日、有志が集まって、令和7年度の企画をする約束ができた。

約束の日、公民館松林分館に集まったのは、小学生3人、中学生2人。このうち、4人はB班の全員である。B

班といえば、大人の参加者から、様々な角度から具体的な指摘を受けた班である。小笠原主事が「あのとき、少し厳しい質問や意見を言われたけれど、大丈夫だった？」と質問したところ、「もっとお話を聞きたかった。知らなかったことや、今まで気が付かなかった考え方が分かった」と異口同音の反応。大人の真剣さが伝わった証である。

子どもたちは、福生市公民館活動にとって、希望の光である。



集合写真